

音楽と私

アンサンブルシーガル横浜 野 利子

ピアノとの出会い

それは私が7歳の春でした。戦後の復興真っ只中で親たちは必死に働き、子供に習い事をさせることができる家庭はそう多くなかった時代と記憶しています。しかしある日、裕福でもない我が家に突然ピアノが届きました。クレーンでつるされて芝生の庭に降るされるピアノを近所の人たちがいぶかしげに眺めていたその様子は恥ずかしくて今でもはっきりと覚えています。

音楽が大好きだった母は戦争により自分が学べなかった音楽への強い思いを私に託したそうです。母の気持ちなど知る由もない私は、お稽古にはイヤイヤ通い、すきあればさぼることを考えながら、高校三年まで「母のために」お稽古を続けていました。そして気づくと音大進学のリールがしっかりと敷かれていました。私はここで初めて自分の生きる道を自分で選択しました。大学では語学を学びそれを活かした仕事に就きピアノからは暫らく遠ざかりました。

しかし、人並みの人生を歩む中、ピアノは知らぬ間に私の心の支えとなっていました。仕事の合間をぬって、結婚式の演奏、フルート、バイオリン、チェロ、コーラスの伴奏をし、母のおかげで音楽を通して大変豊かな時間を過ごさせてもらいました。またクラシック音楽をあまり好きではなかった私は、ポピュラー音楽、ジャズにのめりこみ横浜山下町のレストラン「横浜かをり」で当時全盛期だったポール・モーリア、レイモン・ルフェーブル、ヘンリー・マンシーニの数々の名曲を生演奏させていただいたことは忘れがたい思い出です。

それから・・・

そんな私にも転機がやってきました。

いわゆる両親の介護です。東京に住居のあった私は頻りに横浜の実家に寝泊まりするようになりました。そして今から15年前のある日、アンサンブルシーガル横浜の合奏を見学した私は今まで見たことのない新しい世界に強い衝撃を受けました。

この楽団は今から20年前、定年を迎えバイオリンをこよなく愛した初代表菊池氏と鍋木先生により立ち上げられたそうです。菊池氏は練習場所、楽器保管場所の確保に始まり、合奏に不可欠で且つ大きく持ち運びの困難な楽器、ドラム、ボンゴ、ベース、キーボード等に私財を投じられ、この先10年、20年後に確実にやってくる団塊世代の人たちの楽しめる場所をイメージしてこの楽団を立ち上げたと聞いています。楽団の会則にはその目的として、「長寿社会を健康的で且つ謙虚に奉仕と感謝の心で活動することを目標とする」という一節があります。これは奇しくも20年後の「今」を確実に想定しているような一節です。合奏とは文字通り音を合わせることで、最も大切なことは心も合わせることです。歳を重ねると人は頭も心も固くなりますが長寿社会に音楽を通して柔軟に対応できる柔らかい心を仲間と一緒に磨いていきたいと思えます。

また、アンサンブルシーガル横浜はこの20年の間に素晴らしい先生方に出会ってきました。そして、それぞれの先生からたくさんの教をいただき成長してきました。心から感謝を申し上げます。現在は若くて美しい今井先生にご指導いただき団員全員張り切って演奏に励んでいます。

初代表菊池氏が見ず知らずの私達に残してくれた大きく、深い愛を胸に刻みながら「ONE TEAM」で今日も練習に励みたいと思えます。

尚、菊池氏は平成21年77歳でその生涯を閉じられました。

